様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：３０１２７
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１６８２８

研究課題名（和文）ワ族の文字表記と書承文化に関する調査研究

研究課題名（英文）Studies on spelling systems and writing cultures in Wa

研究代表者
山田　敦士（Yamada, Atsushi）

日本医療大学・保健医療学部・教授

研究者番号：２０６０９０９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：雲南地域には、近年に至るまで、多くの無文字社会が存在した。ワ族も長らく無文字であったが、20世紀に外部よりもたらされた文字表記により、多文字併存へと急速に社会の姿を変えつつある。本研究では、無文字から有文字への文化変容を明らかにすることを目的に、ワ族社会に対するフィールド調査を実施した。その成果として、言語表象物の収集と情報資源化をおこなうとともに、文字表記の使用実態および文字表記を取り巻く諸活動の分析を公開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
私たちは文字表記に囲まれて暮らしている。文字表記は明らかに後発的な文化であり、私たちも過去のある段階で文字表記と出会い、依存を深めてきたはずである。本研究では、無文字から有文字へと日常を変えつつあるワ族を通して、人間と文字表記との関係の解明に取り組んだ。ワ族社会において、文字表記やそれによって記されたテクストは「コト」を記す媒体ではなく、唯一無二の「モノ」としての特徴を垣間見せる。ICT技術が発達し、文字表記を介した情報のやり取りはますます頻繁に、かつ無自覚なものになっていくだろう。文字表記との本質的な関係を知ることは、私たちの過去から今日を省み、未来を定めることにも役立つはずである。

研究成果の概要（英文）：Until recently, many people in the communities of the Yunnan area in southwest China and its adjacent region were illiterate. The society of the Wa people, a Mon-Khmer language group living in the border area between China’s Yunnan Province and Myanmar’s Shan State, is one of these communities. Their society did not have any writing tradition until the 20th century, when three spelling systems were introduced to them. Today, they are in a multi-literate society. The aim of this study is to reveal their cultural transitioning from illiteracy to literacy. We conducted some field surveys on the Wa people living in (or originated from) Yunnan province, China. Based on our field data, we contributed some papers and reports on their newly developed writing cultures, especially in their literacy about three spelling systems, documentation about writing materials and their activities and experiments related to writing cultures.

研究分野：言語人類学

キーワード：ワ族　書承文化　リテラシー

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

中国雲南省西南部からミャンマー連邦東部、タイ王国北部に居住するワ族は、長らく表記習慣をもたなかった。しかし 20 世紀以降、外部よりもたらされたラテン系文字やインド系文字、漢字によって、多文字併存へと社会を急速に変容させている。

研究代表者は 90 年代より、ワ族に対するフィールド調査をおこない、言語の記述的研究および言語データを援用した社会や文化、歴史の研究に取り組んできた。特に 2012 年以降は、科学研究費補助金の代表者や東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の共同研究員などとして、ワ族の最大集居地である滄源県を事例に、文字表記導入の歴史とその使用実態の解明に取り組んできた。一連の研究によって、中国におけるワ族の最大の集居地である滄源県において、概略、次のような点を明らかにしてきた。

（1）3 系統 7 種類の文字表記が併存すること
（2）（漢字を除く）各文字表記が集団象徴のように機能していること
（3）政府式ローマ字表記（正書法）に汎用性がなく、識字率が低いこと
（4）宣教師式ローマ字表記の教育が拠点化され、識字意識が変化しつつあること
（5）ビルマ式ローマ字表記が中国国内に還流し始めたこと
（6）2 種類のタイ文字（シャン系、タム系）が併存すること
（7）各ローマ字表記による言語表象物の収集と分析

このうち、（4）の宣教師式表記および（5）のビルマ式表記の状況は、地域の新しい動態として注目される。中国雲南省とミャンマーとの国境地帯においては、無文字から有文字（あるいは多文字）へという、ワ族と同様の社会文化変容を経験する非漢系少数民族が少なくない。こうした状況を地域動態ととらえ、2015 年、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所に共同研究プロジェクト（「中国雲南におけるテクスト研究の新展開」）を立ち上げた。このプロジェクトと連動するかたちでワ族全体の状況を解明し、地域の歴史文化動態研究を推進することが中・長期的な課題である。

２．研究の目的

本研究計画は、上述の中・長期的な課題に向け、これまでの調査研究を発展的に継承するものである。まず、滄源県での上記の成果を深化させるとともに、未解明の周辺地域へと調査研究を拡大していく。各地域の状況を統合し、ワ族全体の文字表記の使用実態の分析をとおして、口承から書承へという文化形態変容の解明にせまる。研究課題は大きく次の 3 点である。

（1）文字表記の使用実態の解明

これまでの調査研究によって、滄源県に代表される中部地域（ワ語II群方言分布域に相当）における文字表記の使用実態は解明されつつある。その一方で、言語・文化的保守性が強い南部地域（I群方言分布域に相当）、他民族との接触・混淆がすすんでいる北部地域（III群方言分布域に相当）の状況は不明なままである。両地域には、バプテスト宣教師の初期の入植地があり、歴史的に強大であったタイ族政権の存在も確認されている。また、宣教師式およびビルマ式表記の創出と改定の舞台となったミャンマー連邦シャン州への重要な交易路上にあることなど、文字表記使用への外的環境が整っている。

（2）言語表象物の収集と情報資源化

文字表記の使用が認められた場合、それによって表現される言語表象物（書籍、広報物、標語、音楽 CD、娯楽用 DVD、碑文等）へのアプローチが可能である。内容の分析に加え、解題・分類の作業もおこなう。その上で、他分野での利用に資するかたちで、情報資源化をすすめていく。

（3）文字表記を取り巻く諸活動の分析

ワ族社会における文字表記は、誰かが何らかの意図で生み出し、あるいは誰かが持ち込んだものである。文字表記を焦点化することにより、文字表記を取り巻く人びとの諸活動（教育、継承、テクストの作成・流通・所蔵など）も重要なテーマとなり得る。

３．研究の方法

本研究計画では、フィールド調査を主たる研究方法とする。リテラシーの現状を知るために、言語表象物から拾い上げた語彙および生活語彙に基づく調査シートを作成し、「読む」と「書く」それぞれの能力についてインタビュー調査をおこなう。言語表象物の確認においては、学校や役所といった文教機関、寺院・教会や市場といった生活機関に注目する。

調査は主に中国雲南省西南部の各県でおこなうこととするが、必要に応じて、政府式表記の教育基地である雲南省昆明市、さらに宣教師式・ビルマ式表記の創出や改定に関わるミャンマー連邦シャン州やタイ王国北部を視野に入れる。研究期間は広域に分散する研究対象へのアクセスを考え、4 年とする。調査の実施に際しては、これまでと同様、省内の高等教育・研究機関および現地政府系機関の協力を仰ぐこととする。

フィールド調査以外の期間は、収集した資料・情報の整理と分析をおこなう。調査によって得られた一次資料について、現地還元を視野に入れるかたちでテクスト化していく。また、研究調査によって得られた知見について、隣接地域に携わる国内外の研究者と情報交換し、学会などの場を通じて、社会へ発信していく。

４．研究成果

各年度における活動成果と研究成果の概要を示す。

（1）平成 28 年度の活動と成果

研究計画初年となる平成 28 年度は、複数の文字表記が併存する中部地域（滄源県・耿馬県）において、（1-1）ビルマ式表記に対するリテラシー状況の把握、（1-2）各種文字表記による言語表象物の収集・分析、（1-3）宣教師式表記の識字教育の把握、（1-4）未報告地域での言語文化状況の把握、に関する調査研究活動をおこなった。

（1-1）について、滄源県の国境市場において、ビルマ式表記法に関する使用状況のインタビュー調査を実施した。その結果、中国側に居住するワ族、ミャンマー側から越境するワ族ともに、本表記に対するリテラシーが低い可能性が示唆された。

（1-2）について、生活市場および露店等において、三種類の表記法（宣教師式、政府式、ビルマ式）による表象物の収集をおこなった。その結果、出版物等の流通はほとんど認められない一方で、テクスト以外の媒体による表象物（政府式表記法による公的な標識類・観光パンフレット、ビルマ式表記法による DVD 等の電子的な音声資料）の使用が認められ、その一部を収集することができた。

（1-3）について、滄源県内にある教会を訪問し、経年によるリテラシー教育状況の変化を知るための情報収集をおこなった。

（1-4）について、滄源県西部のいくつかの村落に居住するワ族支系に対する予備的調査をおこなった。「本人」または「本族」と他称されるこれら人びとは、滄源県の北側に位置する永德一帯からの移住であり、文字使用を含めた言語文化は周辺地域よりも漢族的であることが判明した。言語動態の解明のため、引き続き調査を継続することとした。

以上の調査研究の状況報告、および新たに得られた知見について、学会および研究会にて発表（口頭、論考）をおこなった。また、学会通信および出版社の WEB 記事を通じて、アウトリーチ活動にも努めた。

（2）平成 29 年度の活動と成果

研究計画 2 年目となる平成 29 年度は、滄源県および隣接各県において、（2-1）未報告地域での言語および社会言語学的状況の把握、（2-2）各種文字表記による言語表象物の収集・分析、に関する調査研究活動をおこなった。

（2-1）について、初年度に確認された滄源県西部の移住村落を再訪し、その言語および社会言語学的状況についての調査をおこなった。「本人」または「本族」と他称されるこれら人びとは、滄源県のワ族とは異なる言語特徴を示すことがわかった。同時に、政府式表記法が機能していないこと、漢字の識字率がきわめて高いことなども明らかになった。

（2-2）について、滄源県内の寺院にて、これまで未報告であった碑文を発見した。破損状況を踏まえ、最大限のテクスト化をおこなった。また昨年度に引き続き、いくつかの生活市場において、三種類の表記法（宣教師式、政府式、ビルマ式）による言語表象物の調査をおこなった。出版物等の流通はほとんど認められないこと、政府式表記法によるテクスト（公的な標識類・観光パンフレットおよびビルマ式表記法による DVD 等）の存在を確認した。

以上の調査研究によって得られた知見については、口頭および論考というかたちで成果の公開に努めた。未報告の碑文はテクスト化するとともに内容分析をおこなった。また、香港で開催された East Asian Anthropological Association の第 16 回大会において、雲南地域のテクスト研究に関する分科会を主催した。

（3）平成 30 年度の活動と成果

研究計画 3 年目となる平成 30 年度は、（3-1）未報告地域での言語および社会言語学的状況の把握、（3-2）華南少数民族におけるリテラシーの比較的研究、に関する調査研究活動をおこなった。

（3-1）について、これまで未解明なままおかれていた北部地区のうち、保山地区騰衝県内における調査をおこなった。当該地域のワ族は過年度にも調査した「本人」または「本族」と称される人びとに近いと推定される。漢語あるいはタイ系言語への言語移行が顕著であること、ローマ字方式の転写法が用いられていないことが確認された。この傾向は文化全体に及ぶようで、当該地域では例えばワ族のいかなる支系にもない民族劇の伝承があるとの情報も得た。おそらくかなり早い時期から周辺民族の文化的影響を受けたものと推定される。

（3-2）について、マクロの視点からワ族の事例をとらえなおすため、雲南省の隣接地域におけるローカルテクストの使用状況の比較的研究をおこなった。これまでの聞き取り調査において、建国直後の中央政府主導による「ワ族の文化」形成期に、ミャオ族の文化事業（歌、テクスト）が引き合いにされたとの情報がある。外部より文字文化がもたらされた点、内部分岐が大きいという点において、ミャオ族もワ族と同じ社会言語学的問題を抱えている。こうしたジレンマはラフ族など、華南少数民の多くにおいて共有されることがわかった。

以上の調査研究によって得られた知見については、口頭および論考というかたちで成果の公開に努めた。East Asian Anthropological Association の第 17 回大会（貴州師範大学）において、雲南地域のテクスト研究に関する分科会が採択された（会場校都合にて延期）。また、雲南地域の書承文化に関する研究書を企画・編集し、勉誠出版より出版した。

（4）令和元年（平成 31 年）度の活動と成果

研究計画最終年となる令和元年（平成 31 年）度は、（4-1）北タイにおけるリテラシーに関する補助的調査、（4-2）テクスト化作業、についての調査研究をおこなった。

（4-1）について、チェンマイ県内において、タイ在住のワ族に対する方言調査をおこない、文字やテクストに関する社会言語学的状況の把握をおこなった。北タイのワ族はローマ字表記法の存在についての認識はありつつも使用実態に乏しいこと、タイ文字の使用が一般的であることが確認された。

（4-2）について、チェンマイ県において、パラウク・ワ集団から得た口頭伝承に関して、テクスト化作業および分析をおこなった。

以上の調査研究によって得られた知見については、口頭および論考というかたちで成果の公開に努めた。まず、10 月に韓国全北大学において開催された East Asian Anthropological Association **の第 18 回大会において、雲南地域のテクスト研究に関する分科会を再び主催し、言語表象物と言語表象活動に焦点をあてた新たな研究領域の創出について提言をおこなった。11 月には釧路公立大学で開催された地域・産業研究会において、東アジアから東南アジアにかけての文字喪失伝承の類型、および無文字社会にあったワ族の文字やテクストに対する文化的態度について講演をおこなった。また、3 月にくろしお出版より出版されたパラウク・ワ語の記述文法書において、最新の社会言語学的知見を公開した。**

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 山田敦士	４．巻 231
２．論文標題 雲南と書承文化	５．発行年 2019年
３．雑誌名 山田敦士編『中国雲南の書承文化：記録・保存・継承』	６．最初と最後の頁 4-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山田敦士	４．巻 231
２．論文標題 滄源ワ族自治県における書承文化：無文字社会における文字表記とテクストのゆくえ	５．発行年 2019年
３．雑誌名 山田敦士編『中国雲南の書承文化：記録・保存・継承』	６．最初と最後の頁 86-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山田敦士	４．巻 16
２．論文標題 パラウク・ワ語の二つの名詞化標識	５．発行年 2018年
３．雑誌名 北海道言語文化研究	６．最初と最後の頁 87-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山田敦士	４．巻 14
２．論文標題 滄源ワ族自治県の碑文テクスト（3）	５．発行年 2018年
３．雑誌名 北海道民族学	６．最初と最後の頁 109-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Atsushi, Yamada	4．巻 10
2．論文標題 Toward the linguistic ethnography of the Wa people	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Journal of the Center for Northern Humanities	6．最初と最後の頁 165-174
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山田敦士	4．巻 25
2．論文標題 パラウク・ワ語における漢語借用語	5．発行年 2017年
3．雑誌名 饕餮	6．最初と最後の頁 62-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　1件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 Atsushi, Yamada
2．発表標題 Texts and writing cultures in the Wa Community: researches and collaborative activities on an illiterate society
3．学会等名 East Asian Anthropological Association（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 山田敦士
2．発表標題 牛皮に記された文字のゆくえ
3．学会等名 地域・産業研究会（招待講演）
4．発表年 2019年

１．発表者名 Atsushi Yamada
２．発表標題 Collaborative Activities using Documented Texts in the Wa Community
３．学会等名 East Asian Anthropological Association（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Atsushi, Yamada
２．発表標題 Word order in the Wa languages
３．学会等名 International Conference on Austroasiatic Linguistics Workshop（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 Atsushi, Yamada
２．発表標題 From illiteracy to literacy: Developments in the writing culture among the Parauk Wa
３．学会等名 East Asian Anthropological Association（国際学会）
４．発表年 2016年

〔図書〕　計2件

１．著者名 山田敦士	４．発行年 2019年
２．出版社 勉誠出版	５．総ページ数 224
３．書名 中国雲南の書承文化：記録・保存・継承	

１．著者名 山田敦士	４．発行年 2020年
２．出版社 くろしお出版	５．総ページ数 362
３．書名 パラウク・ワ語	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考